展覧会評：「修道女:中世の強い女性たち」
会期:2020年5月12日–8月16日／会場: チューリヒ、スイス国立博物館

龍 真未

ヨーロッパの中世の女性たちは修道院で教養を育み、その頂点に座す女子修道院長は次第に教会や経済、そして政治に対し発言権を持つようになっていった。そのような中世の修道女たちに光を当てたのが、2020年春、チューリヒにあるスイス国立博物館において開催された展覧会「修道女:中世の強い女性たち（原題 *Nonnen: Starke Frauen im Mittelalter*）」である[1]。当博物館の中世部門を担当する学芸員クリスティーネ・ケラーの企画のもと、チューリヒ州と接するアールガウ州に今も残るベネディクト会のファール女子修道院の協力を得ながら、スイスを中心とする博物館や修道院からの彩飾写本、彫刻、織物など約300点の精巧な作品が集められ、展覧会が実現した。会場では、小バーゼルの旧クリンゲンタール修道院（現在クライネス・クリンゲンタール博物館）の模型が都市環境における修道女の生活空間と影響力を視覚的に印象づけ、スイスの写真作家アナリス・ストルバ（Annelies Štrba, 1947–）の作品を使った神秘的なインスタレーションは展示室の雰囲気をより幻想的に盛りあげていた。

ヨーロッパでは初期中世より多くの修道院が誕生していたが[2]、修道院制の普及当初より、すべての修道院が男女別々に創設されたのではない。空間的な分離が守られながらも、男子修道院の敷地内にある男女共有の修道院聖堂で祈る修道女も数多くいた。しかし、11世紀のグレゴリウス改革以降、厳格な男女の分離が求められるようになり、その過程で男子修道院内から独立し、新しく女子修道院が設立されていった[3]。こうして、1070年から1170年にはヨーロッパの女子修道院の数は4倍になり、修道女としての生活を送ることを望む女性も増えた。さらに、ドミニコ会やフランシスコ会といった托鉢修道会の誕生で、貴族以外の娘も修道院に受け入れられるようになったことを背景に、1230年

fig. 1a

fig. 1b

figs. 1a, b　ヨハネス・マイヤー著『聖務日課の書』「見習い修道女の指導」「執筆作業」ライプツィヒ大学図書館 Ms. 1548, fols. 83v, 89r

から1300年には、現在のスイスの領域だけでも約80の女子修道院が設立された[4]。

展覧会は全体で大きく二つに分けることができる。前半部では、女子修道院で求められる理想や、男女の修道院のあり方が示された。展示室でまず目をひくのは12世紀中頃に著され広く普及した『乙女の鑑（*Speculum virginum*）』（Kat. 2）の写本であり、「キリストの花嫁」となるための条件である処女性や貞節を説く、修道女のための教義書として親しまれた。さらに鑑賞者の理解を深めるために補助材料として用いられたのが、15世紀におけるドミニコ会内部の修道院改革を担ったチューリヒ出身ヨハネス・マイヤー（1485年没）著の『聖務日課の書』のテクストを彩る物語イニシアルの拡大パネルである（figs. 1a, b / Kat. 36）。本書は、女子修道院における適切な行動をテーマとするものであり、物語イニシアルを通じて、補助的にその理想の姿が視覚化される。ここで興味深いのは、単身でおこなう執筆作業のみならず、食堂での読誦や、誓約前の少女への指導といった共同生活での場面も描かれているところである。ここから、本書は修道生活全般を対象とするものであり、年若い修道女だけでなく熟練の修道女に対してのマニュアル本としての機能もあったことが窺い知れる。物故者名簿、説教・祈り、そして修道女のために教父アウグスティヌス（420年没）が考案した『アウグスティヌスの会則』が収録された12世紀中葉の《グータ・シントラム写本》（fig. 2 / Kat. 5）は、制作者である男女二人の名を冠すことから二重修道院の共同作業を示すものであった[5]。

他方、修道女による熱心な聖母信仰や、土地特有の造形表現も知ることができる。初期中世の聖堂建築を遺すことで有名なミュスタイアの地には、12世紀に修道女が移り住み、1163年にベネディクト会のザンクト・ヨハン修道院が設立された。この修道院に伝わる《玉座の聖母子》（fig. 3 / Kat. 3）は彩色された木彫作品であるが、足を交

fig. 2《グータ・シントラム写本》1154年、ストラスブール神学校図書館 Ms. 37, fol. 4r

fig. 3《玉座の聖母子》1250年頃、ヨーロッパハイマツ材、65×30×25cm、ミュスタイア、サンクト・ヨハン修道院 Inv. Nr. 88

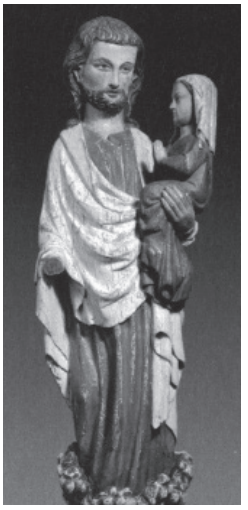

fig. 4 コンスタンツのマイスター・ハインリヒの工房周辺《聖母の魂を抱くキリスト》1330年頃、オーク材、53×20cm、19世紀（台座）、シュトゥットガルト、ヴュッテンベルク州立博物館 Inv. Nr. WLM 14274

fig. 5《聖母の死》15世紀後半、ヨーロッパハイマツ材、49.5×110×32.5cm、チューリヒ、スイス国立博物館 Inv. Nr. LM 16355

差させて座る人物は、修道院の属するクール司教区の芸術品にしばしば見られるモチーフである。15世紀後半の木彫作品《聖母の死》（fig. 5 / Kat. 26）では、別れを惜しむ使徒たちが横たわるマリアを取り囲んでいるが、聖母マリアの死を見つめる白いローブを着たキリストは、ボーデン湖近郊、ザーレムのシトー会修道院に伝わる14世紀の《聖母の魂》（fig. 4 / Kat. 26）のように、魂としての少女の姿のマリアを抱く姿であったと想定される。このように、聖母の横たわる姿にキリストの埋葬を連想させる作品や、キリストに母の魂を抱かせることで、聖母と神の子キリストのつながりが強調される表現方法も生まれていた。

以上のように、鑑賞者が押さえておくべき修道院生活および信仰のあり方の前提条件が関連作品とともに解説されたあと、後半部へと移る。本展の意義は、著名な修道女だけでなく、これまで注目されてこなかった中世の女性たち15人を一挙にとりあげ、光を当てたことにある。後半部では、11世紀から16世紀の宗教改革まで、時代を追いながら中世の修道女たちのライフスタイルの理解を深める作品が7つのセクションで並べられており、ここで本展の副題でもある「強い女性たち」15人が、以下のようにそれぞれ短い「代名詞」を冠して紹介される。

1.「権力者」――ペトロニーユ・ド・シュミエ（Pétronille de Chemillé: c. 1080/90–1149）
2.「博識家」――ヘラート・フォン・ランツベルク（Herrad von Landsberg: 1125/30–1195）
3.「幻視体験者」――ヒルデガルト・フォン・ビンゲン（Hildegard von Bingen: 1098–1179）
4.「都市の支配者」――エリーザベト・フォン・ヴェッツィコン（Elisabeth von Wetzikon: 1235–1298）
5.「清貧の修道会の創始者」――クララ・フォン・アッシジ（Klara von Assisi: 1193/94–1253）
6.「管理者」――グータ・フォン・バッヘンシュタイン（Guta von Bachenstein: 修道院長としての在位1318–1324）
7.「キリストの花嫁」――エルスベト・フォン・オイ（Elsbeth von Oye: c. 1280–c. 1350）
8.「神秘主義者」――エルスベト・シュターゲル（Elsbeth Stagel: c. 1300–1360）
9.「ヨハネ崇敬者」――アーデルハイト・プフェファハルト（Adelheid Pfefferhart: 1319–1382）
10.「ペスト患者」――マルガレータ・フォン・ヴェリコン（Margaretha von Werikon: 1349没）
11.「模範となる者」――カタリーナ・フォン・シエナ（Katharina von Siena: 1347–1380）
12.「読書家」――アグネス・トリューレライ（Agnes Trüllerey: 主宰としての在位1429–1460）
13.「規則遵守者」――アンゲラ・ファルンビューラー（Angela Varnbühler: 1441–1509）
14.「抵抗者」――マルグレット・ツシャンピ（Margret Zschampi: 1470–1525）
15.「最後の女子修道院長」――カタリーナ・フォン・ツィンメルン（Katharina von Zimmern: 1478–1547）

第一から第四セクションでは修道女の政治的・経済的活動ないし知的探究・神秘思想が取り上げられていた。まず「権力ある者」で女子修道院もまた男子修道院と同様に権力の場であったことが示され、男女の暮らすフォントヴロー修道院で初代院長を務めたペトロニーユ・ド・シュミエが第一の「強い」女性として紹介された。続く「博識者」のセクションで知ることができるのは、男性による学問の中心が12世紀以降修道院から司教座付属学校や大学へと移ってもなお、女性にとって学問の場は修道院であったことである。美徳と

悪徳の規範をテーマとする『快楽の園（*Hortus Deliciarum*）』（Kat. 9）の作者ヘラート・フォン・ランツベルクと、『神の業の書（*Liber divinorum operum*）』（Kat. 11）をはじめとする三つの幻視体験に基づく著作を生み出したヒルデガルト・フォン・ビンゲンが取り上げられた。次のセクション「影響力のある者」では、女子修道院長に都市における政治的発言権があったことを示す例としてチューリヒのフラウミュンスターの修道院長エリーザベト・フォン・ヴェッツィコンが登場し、アッシジのフランチェスコ（1226年没）の精神性に深く感銘を受け『修道会規則』を執筆した、聖クララ修道会の創始者アッシジのクララが紹介される。続く、神への精神的接近を追究するセクションが「苦しみを共にする者」である。自ら鞭打ち、キリストとの神秘的結合を目指したエルスベト・フォン・オイが印象深い。

第五から第七セクションまでは、時代の重みを感じながらも勢いを持って展開していく。まず「1350年からの激動と変遷」セクションでは、黒死病に対する苦難が語られ、守護像としての聖母像や葬儀に使われる衣装が示された。貴族の多い修道院で暮らす修道女はある一定の自由を享受していたが、14世紀以降、禁欲主義への回帰と、修道会規則の厳格な遵守がもとめられるようになる。次セクション「刷新」では、こうした修道院制度の改革が示され、先述のヨハネス・マイヤーの著作（figs. 1a, b / Kat. 36）も実際に見ることができた[6]。フルドリッヒ・ツヴィングリに代表されるスイスの改革派は、修道院廃止を要求しており、宗教改革が強まる地域や都市では、深刻な変化をもたらすことになった。フラウミュンスターの修道院長カタリーナ・フォン・ツィンメルンは、チューリヒの議会に宛てた1524年12月8日の文書（Kat. 42）をもって、修道院のすべての財物と権利を放棄し、チューリヒ市に引き渡すことを宣言したが[7]、この最後の修道院長が15人目の女性であり、宗教改革者や人文主義者とも交流のあった彼女によって「修道女」展は幕を閉じる。

2021年はスイスにおける女性参政権獲得の50年目にあたり、チューリヒ国立博物館では「女性の権利」展

《ザンクト・カタリーネンタールのキリストとヨハネのグループ》
fig. 6（左：参考）コンスタンツのマイスター・ハインリヒ、1280/1290 頃 (?) 、アントウェルペン、クルミ材、141×73×48cm、マイヤー・ファン・デン・ベルグ美術館 Inv. Nr. 2094
fig. 7（中）アーデルハウゼン修道院に由来、1350 年頃、オーク材、高さ 34.5cm、フランクフルト、リービークハウス、彫刻コレクション Inv. Nr. 1447
fig. 8（右）ボーデン湖周辺 (?)、1400 年頃、ポプラ材、30.5×19.5cm、バーゼル歴史博物館 Inv. Nr. 1913.68

が開催された。この展覧会は18世紀末のフランス革命以降ヨーロッパ全土に拡大した権利獲得にはじまり、20世紀のスイスの女性参政権獲得を経て現代に続くフェミニズム運動の流れを追うものである。本稿で紹介した2020年の展覧会は、副題にもあるように、中世における女性の権力の所在、行動力や精神力の強さをテーマとすることから、2021年の「女性の権利」展に向けた序章とも言えるだろう[8]。各時代に代表される15人の女性を通じて、11世紀から16世紀までの女性の宗教的生き方の多様性を辿るという展覧会の大々的試みは称賛に値する。

以上のように、素晴らしい題材と素材が集まった展覧会であったことは間違いないが、それらをより生かせたであろう改善点を2点指摘しておきたい。作品の展示方法という点と、近年の研究動向の反映という点である。これらに関して、展示品が多く見られたトゥールガウ州ディッセンホーフェン近郊にあるドミニコ会のザンクト・カタリーネンタール修道院で熱心におこなわれたヨハネ崇敬とそれに伴う制作活動を例に、簡単に確認したい。

fig. 9《グラデュアーレ》1312年頃、ザンクト・カタリーネンタール修道院、チューリヒ、スイス国立博物館、ゴットフリート・ケラー財団とトゥールガウ州の寄託 Inv. Nr. LM 26117

fig. 10（参考）《グラデュアーレ》の断片、1312年頃、ザンクト・カタリーネンタール修道院 チューリヒ、スイス国立博物館 Inv. Nr. LM 29329.2

神への霊的・肉体的接近をのぞむ神秘思想において、キリストに最も愛されたとされる使徒ヨハネは、神の仲介者としても、さらにはキリストの愛を欲する修道女が同一化しうる存在としても適任であり、それゆえ造形モチーフとしても好まれていた。12世紀、まずミニアチュールのなかに、ヨハネによる福音書の「イエスのすぐ隣には、弟子たちの一人で、イエスの愛しておられた者が食事の席についていた」（13章23節）の記述を受けて、ヨハネがキリストに寄り添う姿が描かれるようになる。のちにこの二者の像は大小多くの彫刻に表現されたが[9]、そのなかでも現在アントウェルペンのマイヤー・ファン・デン・ベルグ美術館に所蔵される、等身大の作例（fig. 6）は、修道女アーデルハイト・プフェファハルトがこの前で幻視体験をしたとも想定されており[10]、重要視されている。展覧会では、彩色されたタイプ（fig. 7 / Kat. 33）と金箔を施したタイプ（fig. 8）、これら二つのバージョンが並んでいた。色彩や身体のプロポーションの違いはあるが、両作品ともに小型彫像であるために、個人の祈祷用であろう。また、同修道院には修道女たちのミサ聖歌用写本《グラデュアーレ》がいくつか残されているが、金地に美しい絵画的装飾をもつ1312年の写本も展示されていた（fig. 9 / Kat. 31）[11]。随所に描かれる祈りを捧げるドミニコ会修道女の姿からは、ザンクト・カタリーネンタール修道院の修道女たちの強い神秘思想の造形的反映を理解することができる。この写本はアントウェルペンの作例の数年後に作られ

たと考えられており、イニシアルのなかのキリストに寄り添うヨハネの姿（fig. 10）は、この表現が当時人気を博していたことの証である。しかしながら、これらの作品は、作品そのものは興味深かったものの、個々の作品同士の繋がりを明示する解説が少なかった。展示室において、実際に、上記のような背景を読み解くことができれば、作品理解がより深まったと思われる。

もう一つの指摘は、近年の研究動向である。2002年のハンバーガーの論考や2005年のボンとエッセンの展覧会カタログによって、当修道院内の祭壇前にはヨハネ像と対照するように洗礼者ヨハネの像が設置されていたことが判明しており[12]、それゆえキリストとヨハネの群像は「使徒ヨハネ」の像として扱い、洗礼者ヨハネの像と合わせて考察されるようになっている。しかし、展覧会では前述の二つの小型彫像は隣り合わせで並ぶものの、有名なアントウェルペンの作例への言及がないばかりか、洗礼者ヨハネとの関係もほのめかされなかった。同様に、ハンバーガーによれば、《グラデュアーレ》において二人のヨハネはテクストにおいてもミニアチュールにおいても結び付けられており、洗礼者によって預言され受肉したキリストと、福音書記者によって伝えられるロゴスの同一性が示唆されているという。こうした二人のヨハネ崇敬や修道院の神秘思想とからめて作品分析をすれば、近年の研究動向を反映した展覧会となったに違いない[13]。

とはいえ、過激な改革派であるツヴィングリが修道院を破壊した都市チューリヒにおいて、多くの作品が集結し、修道院に関する展覧会が開かれたことは喜ぶべきことであった。スイスの貴重な作品とともに、女子修道院が教育機関として機能し、男性が支配する社会への女性の経済的・政治的参加が為されていたという実例が示された点、そして盛期中世の教会・修道会改革から宗教改革までの数々の個別事象は連綿とした繋がりのなかで生じたことが理解され得たという点は、本展覧会の最大の功績といえよう。

註

1 展覧会カタログはSchweizerisches Nationalmuseum (Hrsg.), *Nonnen. Starke Frauen im Mittelalter*, Berlin 2020. 開催期間として当初は2020年3月20日から7月19日までが予定されていたが、新型コロナウイルスの感染拡大に対しスイス連邦政府が博物館・美術館を3月17日から5月11日まで閉鎖したことに伴い、開幕は5月12日に延期された。このロックダウンにより実質的に期間が短縮された一方で、ウェブ上でVR見学も可能になっており（https://virtuell.landesmuseum.ch/, 最終閲覧2021年5月11日）、会期がすぎた現在においても展覧会の様子を覗くことができる。

2 修道会のはじまりや規則、西欧における普及に関しては*Ibid*., S.11を参照。スイスにおける女子修道院制度は、5世紀半ばフランスのジュラ地方に設立された修道院の二重修道院として、近郊に位置するボールム（現在のヴォー州）に女子修道院が設立されたことにはじまる。そののち東部では、アルプス地方の交通路の窓口であるクール司教座の管理下において、女子修道院が700年頃に現在のグラウビュンデン州のカツィス（Cazis）に、806年には同州のミシュタイル（Mistail）に建設された。*Ibid*., S. 12. なお三つのアプシスを持つミシュタイルの修道院聖堂は9世紀の建造物を現代に伝える重要な遺構である。

3 チューリヒ郊外のファール女子修道院は、アインジーデルンの二重修道院の片割れとして1130年に設立されたが、本文でも述べたように、男子修道院をもとに生まれた女子修道院は少なくない。

4 *Ibid*., S. 14.

5 グータはシュヴァルツェンタン修道院の祈祷修道女であり、シントラムはアルザスのマルバッハ修道院の祈祷修道士であった。本写本のテクスト執筆をグータが、ミニアチュール装飾をシントラムが担当したと考えられる。挿絵には両者が描かれている。*Ibid*., S. 76.

6 ヨハネス・マイヤーについては*Ibid*., S. 55、並びに2005年にボンおよびエッセンで開催された展覧会カタログJutta Frings und Jan Gerchow, *Krone und Schleier. Kunst aus mittelalterlichen Frauenklöstern*, München 2005, S. 401を参照。生没年に関して後者は1422–1482年と記されていたが、今回は本展のカタログを採用した。

7 Schweizerisches Nationalmuseum (Hrsg.), *op.cit*., S. 143.

8 展覧会カタログは独語・仏語・伊語で出版された。独語版は以下。Schweizerisches Nationalmuseum (Hrsg.), *Frauen. Rechte: Von der Aufklärung bis in die Gegenwart,* Zürich 2021. なお女性権に関する展覧会は2021年に首都ベルン、ザンクト・ガレン、ローザンヌなどスイス各地で開催された。

9 ザンクト・カタリーネンタール修道院にまつわるキリストとヨハネ群像に関しては本展のカタログ（S. 120）および、Jutta Frings und Jan Gerchow, *op.cit.*, S. 409–418を参照。

10 修道女アーデルハイト・プフェファハルトの奇跡についてはSchweizerisches Nationalmuseum (Hrsg.), *op.cit.*, S. 118–119を参照。

11 1312年の《グラデュアーレ》写本のファクシミリは以下。*Das Graduale von St. Katharinental. Faksimile-Druck der Handschrift LM 26117 alternierend im Schweizerischen Landesmuseum in Zürich und Museum des Kantons Thurgau in Frauenfeld. Entstanden um 1312.* Faksimile und Kommentarband in 2 Bdn., Luzern 1980–1983. ミニアチュール装飾についてはJeffrey F. Hamburger, *St. John the Divine: The Deified Evangelist in Medieval Art and Theology*, Berkeley 2002, pp. 83–164およびJutta Frings und Jan Gerchow, *op.cit.*, S. 406–407に詳しい。

12 洗礼者ヨハネと使徒ヨハネの両者を熱心に信仰するザンクト・カタリーネンタール修道院では、聖堂内に洗礼者ヨハネと使徒ヨハネの二つの像が設置された。これらがどの作品であるかは不明だが、アントウェルペンの作例と同様に、コンスタンツのマイスター・ハインリヒであると想定されている。詳細は以下。Jeffrey F. Hamburger, *op.cit.,* 2002, p. 72およびJutta Frings und Jan Gerchow, *op.cit.*, S. 409–410.

13 2005年、ボンおよびエッセンで開催された大規模な特別展「王冠とベール：中世女子修道院の美術」において、キリストとヨハネ群像は注目をあびた。展覧会カタログは註6を参照。また展覧会と並行して国際シンポジウムが2005年に開かれた。シンポジウムの報告論文集は以下。Jeffrey F. Hamburger, Carola Jäggi (Hrsg.), *Frauen–Kloster–Kunst. Neue Forschungen zur Kulturgeschichte des Mittelalters: Beiträge zum Internationalen Kolloquium vom 13. bis 16. Mai 2005 anlässlich der Ausstellung "Krone und Schleier,"* Turnhout 2007.

［図版出典］

ライプツィヒ大学図書館デジタルアーカイヴ https://digital.ub.uni-leipzig.de（figs. 1a–b）/ Schweizerisches Nationalmuseum (Hrsg.), *Nonnen. Starke Frauen im Mittelalter*, Berlin 2020（figs. 2–5, 7, 10）/ Jutta Frings und Jan Gerchow, *Krone und Schleier Kunst aus mittelalterlichen Frauenklöstern*, München 2005（figs. 6, 8, 9）